黒箱―渋谷H

設計：廣部剛司建築設計室

左――ダイニングから中庭を見る
上――アプローチから玄関を見る
下――浴室

左――中庭から室内を見る
右――路地　突き当たりは水まわり空間

黒い皮膜で柔らかな生活をつつむ

廣部剛司
TAKESHI HIROBE

渋谷区の住宅街に位置する厳しい形状の旗竿敷地。そこは住宅が密集する環境で、周りに開くということが非常に困難だった。そのため南側に、おおらかな中庭を取ることによって、占有された外部空間を内部と連続的に使う…という方針は、初めて敷地を訪れた時から変わらぬ方向性としてあった。生活領域を囲い取ることによって生まれる“包み込まれるような内部＋外部”を、耐候性の上でも、熱環境上も有利に働く“アルミ合金＋断熱材の黒いパネル”で覆うことで、「どこまで柔らかな空気を持った住空間としてつくり上げることができるか？」というテーマに方向性を収束させながら設計した住宅である。

タタミスペースを除く1階部分の床は、路地や中庭も含め、内部用・外部用の使い分けこそしているが、同じ黒いタイルで仕上げられており、全体を1つの領域として感じることに一役買っている。全面開口が可能なサッシュを開放することで、内外合わせて30畳程度の大きな空間として感じることができる。また、内部にはタイル下に床暖房が施されている。

浴室は北側に設けられた坪庭に面しており、露天風呂気分での入浴が可能である。プランや敷地形状から生じる複雑な形ゆえに在来工法にモザイクタイルを張った浴槽となっており、それがそのまま天井の桧板まで壁仕上げとして延びている。竹の植えられた坪庭を、LDKとも共有することによって南北方向の抜けを生み出している。これは家の中の“風”を動かすという目的も同時に果たす。

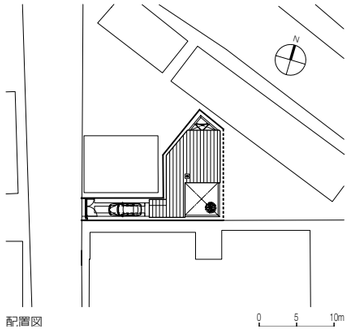
この住宅の立地は住宅地ではあるが“都心”である。テンションの高い街から生活空間へと如何にして気持を切り替えるか、それはこの家で特に気に掛けたことである。収納スペースを確保することと、将来、犬を迎え入れることが前提としてあったので、そのための“路地”を玄関から中庭に向けてつくった。しかし、そこから中庭に直接出るのは犬の散歩帰りだけである。引き戸を開けて第2の玄関を入ると、ステンドグラス越しにもれる黄色く柔らかな光が上から注ぐ。そして、低めに設けた地窓からは池の揺らぎがほのかに中庭の存在を示唆する。光に向かって進み、その突き当たりを抜けた先に、突如として2層吹抜けの大きなガラス面と中庭が目に飛び込んでくる。この距離感を生活と両立させながら生み出すこと、そして、その黄色い光の階段室空間で、上下階の公私感を隔て、つなげること。それらすべてが、「私たちは外で生活がしたいのです」と言われたクライアントの生活空間を支えている。❄

ひろべ・たけし――建築家・廣部剛司建築設計室／1968年生まれ。日本大学理工学部卒業後、芦原建築設計研究所に入所。1998年、建築を巡る8ヵ月の旅へ出るため退所。1999年、廣部剛司建築設計室設立。現在、日本大学・明治大学非常勤講師。
主な作品：Barcarolle（2002）、茶畑の家（2004）、桜並木の家（2005）、南青山の家（2005）など。
著書：『サイドウェイ 建築への旅』（TOTO出版　2006）。

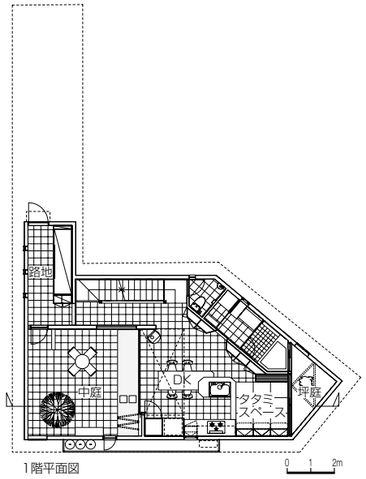
■建築概要

名称：黒箱―渋谷H
所在地：東京都渋谷区
設計：廣部剛司建築設計室
施工：sobi
家族構成：夫婦＋犬（予定）
敷地面積：132.87m²
建築面積：53.33m²
延床面積：126.58m²
規模：地下1階、地上2階
構造：木造（地下：RC造）
工期：2005.6～2006.3

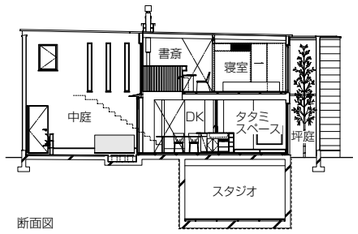
●INAX使用商品●床タイル：フォスキー IPF-300/FS-14,FS-24、便器：サティス、壁タイル：インテリアモザイク ニュアンス,インテリアモザイク 窯変ボーダー



配置図



1階平面図



断面図